

## 山内マリコ『あのこは貴族』における女同士のつながり

久保 陽子

## はじめに

山内マリコ『あのこは貴族』は、『小説すばる』（二〇一五年一〇月号～二〇一六年七月号）に連載後、加筆・修正を行った上で、二〇一六年に単行本化された。二〇二一年には映画化もされている。境遇の異なる二人の女性登場人物が一人の男性をきっかけにつながり、互いに影響を受けながら、新しい人生を歩んでいく物語である。全四章で構成され、「第一章 東京」では東京出身で育ちの良い榛原華子の、「第二章 外部」では地方出身で大学入学のために上京し「苦労人」である時岡美紀の、それぞれの境遇と青木幸一郎との出会いが書かれる。「第三章 邂逅」で幸一郎の婚約者となった華子と恋人である美紀が出会い、「終章 一年後」では、幸一郎と離婚を決意した華子と、幸一郎との関係をきっぱりと断ち切った美紀が、それぞれに新しい人生を歩んでいることが示される。

二〇一六年六月に建替えに着手されたホテルオークラ東京が話題にのぼっていることから、物語の時間は作品発表当時とおおむね重なる。

山内マリコは、友情、恋愛、結婚、仕事といった日常的で身近なテーマを、主に女性同士の関係性において、とりわけ地方の閉塞感の中でその生きづらさを描いている。『あのこは貴族』でも同様のテーマを扱っているが、しかしながら、東京の特権階級でも、地方でも、狭く閉じられた人間関係における閉塞感と居心地のよさは「根本的には同じこと」とし、東京／地方という二項対立を相対化する。のみならず本作では、東京／地方、既婚／未婚、妻／愛人、結婚（家の内）／仕事（家の外）、依存／自立、裕福／貧乏といった二項対立の構図を持つものの、その対立や分断を乗り越えていくことが企図されている。

本作の先行論として、谷川拓矢は移動し続けることでもなく安住するでもなく、「部外者」性という距離を担保しつつ受け入れること」で「真に「自由」な生の可能性があることを提示した」一作品だとする。最終的に華子も美紀も東京／地方を行き来する姿が描かれるように、

移動は「自由」の獲得であり、此処から他所へという空間の移動は、地縁に根付く因習的で固定的な価値観をゆるやかにほぐしていく。さらに移動に伴う他者との出会いは、これもまた「普通」という認識にある自己を相対化する契機となりうる。土井孝義は自己の「潜在的な可能性」に気づかせてくれるのは、「意外な反応を返してくれる異質な他者」であり、「互いに「貴族」となりうる存在」だと述べる<sup>二</sup>。

このように、移動と他者との出会いは、自己や自分が立脚する場所を相対化し、彼女たちの新たな生の獲得のための契機となる。それに加え本論で注目するのは、女同士のつながりである。彼女たちは互いの差異性を認めつつ、互いの人生に憧れながらも、自身を見つめなおし新たな充実した人生を歩んでいく。その際に「女同士を分断する価値観みたいなものが、あまりにも普通にまかり通って」いることに抗い、彼女たちがいかにしてその価値観を脱していくのかに着目したい。本論では、まず華子と美紀の対話を場所との関連の中で読み解き、次に、彼女たちが選んだ新しい人生のあり方をケアの視点を接続することで考察し、最後に幸一郎に視点を転じ、女同

士のつながりにおける男性の存在について考えてみたい。

### 一、華子と美紀の出会いーマンダリンオリエンタル東京

「第一章」では、二十七歳を目前にして、婚活に奮闘する華子の姿が描かれる<sup>三</sup>。「辛かったり大変だったりしたけど、同時にはじめて自分の意志で生きてるって感じ」たとのちに振り返っているように、婚活は華子の成長の糧でもある。なぜなら他者との交渉の中で、自分の価値をはかられることで自分を知り、また自分の望む相手や条件を見極め選定していくことで自らの欲望を次第に明瞭にしていくからだ。このように、他者と出会うこと、それも互いに説明せずとも通じ合う特定の東京の内部から外部に出て、そこで自分と価値観を異にする他者と出会うことで、ようやく自分を知りえていく。美紀との出会いも同様の気づきをもたらす。華子と美紀が対話をする場面は二回ある。

一度目は、婚活を通じ華子の婚約者となった幸一郎が、とあるパーティで美紀と一緒にいるところを、華子の友人である相楽が不審に思い、二人を引き合わせた形だ。

この時に、華子と同じ世界に住む相楽が指定したのはマ  
ンダリンオリエンタル東京のラウンジである。そこには  
「多くは時間とお金に余裕のありそうな優雅なご婦人た  
ち」が集うが、こうした高級ホテルのラウンジを日常的  
に利用するのが彼女たちの文化である。

であるから、高級なこの場所は相楽と華子のテリトリ  
ーのように思われるが、そこに美紀を交え、女同士が腹  
を割って話しあう交流の場となっている。そこで、華子  
と相楽の家の立派な雛壇の写真を見て美紀が驚き、クリ  
スマスにミサに行ったことのない美紀に華子と相楽が驚  
くように、自分たちの「普通」が「普通」ではないとい  
う文化の違いを思い知る。自立心が強く気が合う相楽と  
美紀に対し、依存的な華子は痛烈に批判もされる。また  
幸一郎をめぐる華子と美紀が当事者であるのに対し、相  
楽はあくまで第三者である。互いの話に「興奮気味に共  
感」し「激しく同意」する一方で、「拒絶され傷ついた」  
り、差別の笑いに「ピクリと反応」するように、共感と  
反論とが混じり合う。そこでは必ずしも同質であること  
の心地よさが歓迎されるわけではなく、意見や立場は違  
ってもそれに驚き傷つきながらも、自分の価値観を他者

のそれと折衝していくことによって、自己を相対化し見  
つめなおす機会となっている。

ところでマンダリンオリエンタルは、イギリス系の商  
社が建てた香港に拠点に置く五つ星ホテルで、後にタイ  
のホテルを買収し、世界一三カ国に展開するホテルグル  
ープである。ホテルの給仕係の女性は「東洋のどこの国  
の民族衣装ともつかない、不思議にエキゾチックな制服  
を纏っていた」ように、それぞれの文化が他文化への憧  
憬とともに織り合わされることで、明確な境界のない、  
それゆえどこにもカテゴライズされることのない、文化  
が行き交う磁場となっている。このグローバルな外資系  
ホテルの窓からは「富士山らしきシルエット」が見えて  
おり、「高級感溢れる内装」と一体となってコーディネート  
トされている。日本の伝統・象徴としての富士山を望み  
ながら、モダンに洗練された空間で語られるのは、近松  
門左衛門『心中天網島』における「女同士の義理」とい  
う古くも、また新しくもある物語である。

『心中天網島』では、治兵衛をめぐって、その妻おさ  
んと遊女小春の攻防が書かれる。攻防といっても敵対す  
るわけではなく、「女の相見互事」<sup>あひみがひこと</sup>、つまり「弱い女どう

し互いに助けあうもの」<sup>四</sup>とし、互いの心情を慮り、「女  
 同士の義理」を立て、互いに身を引きあう。ドイツ留学  
 中にこの話を知った相楽は、「日本スゴいじゃんって、本  
 気で感動した」というように、グローバルな社会におい  
 てローカルの再発見をする。日本の古典における心中は  
 古い美学ではあるが、その中にある女同士のきめ細やか  
 な心の交流と行動の潔さを、現代においても価値あるも  
 のとして再認識している。このエピソードは自文化の再  
 発見という文脈で語られるものの、同時に、本作が男性  
 を中心に家の内と外、つまり正妻と愛人に分断される構  
 図を持つ、極めて古い物語の型であることを知るに至る  
 のである。しかしながら「普通なら憎み合って敵対関係  
 になっても不思議ではないが、そうはならないのが、こ  
 の映画（本作を原作とした映画を指す 注引用者）の面  
 白いところ」<sup>五</sup>というように、古い型を踏襲しながらも、  
 心中では終わらない新しい女性たちの物語が創出されて  
 いく。

「女同士の義理」を「かっこいい」として相楽の話に  
 共感した美紀は、自らが身を引くだけでなく、対立する  
 相手の心情へと想像力を傾けていくのである。美紀は華

子の質問に誠実に答えるだけでなく、「榛原さんは、幸一  
 郎のどこがいちばん引つかかっているの？」と質問し、目  
 前の困っている相手の話に耳を傾け、力になるうとす  
 る。また相楽も「友情の方にヒビが入る」ことを覚悟の  
 上で、また結婚したら独身の自分とは疎遠になってしま  
 うのならば「首突っ込めるうちに突っ込んでおいても、  
 いい」とし、お節介を承知で華子のために尽力する。こ  
 のように立場を越えて相手を思い合う気遣いは、華子を  
 癒し、これにより華子が安心して自分を主張することを  
 可能にする。そもそもコミュニケーションに関して、華  
 子は悩みを誰にも相談できない性格であり、また家族の  
 中でもほとんど口を開かず、幸一郎に対しても「主張ら  
 しい主張をなにつしたことがない」。

そんな華子の悩みや、ストレスで親指の爪を噛む癖を  
 「察してくれ、なおかつ言葉を選んで対応してくれ」る  
 のがネイリストの西田燿子であるのは象徴的といえよう。  
 燿子は技術的に爪をケアするだけでなく、「空気が読めて  
 目端が利く」ように、相手の心情を思いやる能力に長け  
 ている。相手への気遣いがある燿子が相手だからこそ、  
 意見を言わない華子であっても、悩みを打ち明けられる



し、趣味に合わないネイルの色の提案を、遠慮がちではあるが断り、意見を主張することができたのだ。同様に華子は幸一郎との関係において「半年間隠してきた気持ち」を、美紀と相楽の前で「批判されるのを覚悟して、心の内を正直に語」りえている。気を許し近況や悩みを打ち明けることで華子の心は、ボロボロになった爪をケアされるように癒されていく。それだけでなく、最終章で華子は「ギャラ交渉」といったコミュニケーションをたぶんに駆使する仕事に就いているように、こうした思いやり溢れた女同士のつながりの中で、華子は少しずつ、自己主張する方法を学んでいくのである。

## 二、華子と美紀の出会い―「東京」

美紀との一度目の出会いを経て華子は、タイプの違う外側の世界に生きる美紀や相楽と比べて、「この狭い狭い世界で、うまくやっていくしかないのだ」と、その差異性を認め、自分の世界により強固にしがみつくことを決意している。狭い世界とは「結婚は誰もが当たり前のようにはありつけるゴール」と思い込み、祖母や母の価値観

を当たり前のように踏襲した、幸一郎との結婚生活のことを意味する。しかし美紀との二度目の出会いで、華子は考えを変えている。後に幸一郎にその時のことを話し、「自分の力で生きてる」美紀を見て「ああいうふうになりたいなあって思うようになった」と述べている。「結婚にいつぱい期待していた」華子は、他方、いつともなく美紀のように自立的な生き方にも憧れていたことになる。その憧れの美紀の生き方を自らも実現しようとする決意となったのは離婚であろうが、それだけではない。結婚生活の悩みを相談するために、この時、二人が会って話した場所は、美紀が指定した有楽町のイタリアンレストランである。そこは「みんな東京がアウェイだから、張り切っておしゃれし」、その人たちが作り出している「フェイク」の「東京」だという。そこには「独特の活気がある」というが、その「活気」の原動力は憧れ、もしくはコンプレックスであろう。店内に充満するバイタリテイに圧倒」された華子は、自分の人生が「保守的で、退屈」と思い至るように、この場所も華子へ気づきをもたらしている。東京出身の華子が「東京」を発見するのは皮肉ではあるが、この「東京」は東京出身者では

なく、移動者たちの「強い独立心」に支えられている。

そして本作では移動はエンパワメントと結びついている。例えば相楽はドイツに音楽留学をし、経済的精神的に自立している。また華子の婚活相手の一人である商社勤務の亀井は、三年南アフリカに赴任し、日本に戻ってきて「軽く無双状態」の独身生活を謳歌している。ネイリストの燿子も、ハワイのネイルアカデミーに短期留学し、三〇歳を前に独立し自分の店を構えている。彼らはいずれも一度は「アウェイ」に身を置くことで、移動によって自己を相対化する視点を獲得する。そして一年後が描かれる終章において、華子と美紀も、移動しながら労働し、それぞれが風通しの良い中でのびのびと働く未来が示される。

### 三、ケアと労働をつなぐ

最終章で華子はヴァイオリニストである相楽のマネージャーとなり「いまの自分の方が好きだし、毎日が楽しい」と、充実した日々をおくっている。スケジュール管理、健康管理、運転手、雑用係、といった公私にわたる

広範な周辺の世話をするマネージャーの仕事は、家庭の内／外に簡単に線引きができない。そのことは芸能人のマネージャーを、配偶者や家族や友人などのいわゆる身内が務めている場合もあることからわかる。なぜなら、マネージャーの仕事は、単に仕事と呼ばれる業務だけでなく、配慮や気遣いといったケアの領域まで含める場合もあるからだろう。実際、華子は離婚したのち、相楽のマンションに住まわせてもらい「成り行きでマネージャーのような仕事を買って出ている」ように、友人との同居の延長上にその仕事はある。「ただで住まわせてもらうのも悪い」という理由で仕事を始めたわけだが、ここに公私を隔てないゆるやかな仕事のあり方がみられる。

私的領域の労働を家の外側へと広げていく仕事のあり方は、料理上手な華子の母・京子が、知り合いに請われて一時期ひらいていたという料理教室も同様である。帝国ホテルの正月料理を味わいながらその料理の味や作り方に関心を寄せる「研究熱心」な京子が作る料理と、それを学ぶ生徒はおのずとその層は限られてくるため、極めて内輪の知り合い同士が参加する教室であったらうことは想像がつく。もちろん相楽も普段は東京で、セレ

ブと括られるきらびやかな人が集まるパーティといった、限られたコミュニティでの演奏が主ではある。

しかし、それにとどまらず地方での演奏会にも赴き、その仕事は自分の世界の外側へと向けられている。二人がその人生の中で「必修の科目かなにかのように」享受してきた様々な文化・芸術は、東京やさらにその内側の狭い世界の特権的なものではないはずだ。「普段はクラシックに縁のない地元の人にも演奏家を歓迎してくれ、交流するのが楽しみの一つ」というように、クラシックに縁がないだけで、音楽を楽しみたい地元の人々の存在に彼女たちは目を向け、自らが移動し赴くことで彼らの文化的な欲求を満たしていくのである。それは「交流」であり決して一方的なものではなく、華子にとっても「新鮮」で「視野もぐっと広がった」経験ともなる。当たり前のようにタクシーを使い高級ホテルのラウンジで会っていた二人が、グーグルマップを見ながら自分の足で地方の美味しいカレーを求めめる姿には、自分の育った慣れ親しんだ「普通」の環境から、新しい世界へと移動したことが象徴的にあらわされている。

今でこそマネージャーとして相楽の体調を気遣う華子

だが、かつては幸一郎に「ケアしてくれな」いことを不安に思っていることを、美紀と相楽に話している。ケアについて山内は、エッセイ『皿洗いするの、どっち？目指せ、家庭内男女平等！』で「ケアとは、世話や配慮、気配り、手入れ等を指します」<sup>7</sup>と定義している。そこには世話や手入れという労働的な側面だけでなく、配慮や気配りという感情的な側面も含まれている。幸一郎は結婚後、仕事で忙しくし華子からの記念日の食事の提案を断り、ラインを既読スルーするなど、華子への気配りが行き届かなくなる。この二つの「事件」が華子を傷つけ離婚を決意する引き金となるが、華子は「大事に育てられたがゆえ、自分が大事にされないことに人一倍ダメージを食らってしまう」ように、ことさらケアされることを望んでいる。

ところでケアは自立しているようにみえる「富裕層こそが最も依存的であり、彼女たち・かれらは、数え切れないほどの個人的な仕方で、お金を支払う見返りにサーヴィスを提供してくれる人たちに依存している、という皮肉」<sup>8</sup>があるという。小説の冒頭で華子はタクシーで帝国ホテルに乗り付け、お節を作る代わりになじみの料

理屋で食事をし、そのまま帝国ホテルで年末と年始を過ごすように、榛原家の生活は有償のケア労働によって多くがまかなわれている。それと対比されるのが正月に実家に戻った美紀が、食卓に並んだ母の手料理を見て、これに加えてお節まで作っていたことに「その労働量を思っつてくらぐらした」場面である。時岡家は自分で車を運転するか、電車に乗って移動する。

このように華子の人生は、あらゆるケアによって成り立ち、それゆえ幸一郎にもそれを望み、また先述の美紀と相楽との対話の中でも、専らアドバイスをされる側であり、気配りは一方的に華子に向かっている。しかし、ケアされる側にいた華子が「誰かの世話をし、支え、尽くすことでその人が輝くと、得も言われぬ喜びを感じる性分」であると、自分を再認識することに至る。華子が同じ場所に居続け、夫に「寄生」する専業主婦の役割に縛られ続けていたら、専らケアされることに捉われ続けるため、得られなかった視点であろう。

一方、美紀は最終章で同郷の友人でかつて共に慶応義塾大学に進学した平田佳代とともに、地元で観光客を誘致するための企画や制作をする会社を始めている。東京

と地方を行き来する姿は先の華子たちの移動と重なる。また美紀と平田の姿は、地方の町おこしをテーマにした次の小説『メガネと放蕩娘』（文藝春秋、二〇一七年）へと繋がるものである。平田がいう「東京目線で地元のいいところを見つけ」という外部の視点の導入の重要性は、引き続き描かれることになる<sup>九</sup>。

ところで美紀が地元へと目を向けたのは、華子と出会うことで、生まれながらにして分厚い壁があることを改めて思い知らされたことが一つにはある。加えて、かつての憧れの内部生（大学以前から慶応に通う慶應大生注引用者）と第一印象こそ「寸分違わぬ」華子と実際に言葉を交わしてみると、幸一郎との関係で悩み、痛々しいほどに無垢な存在であることを知り、憧れの空虚<sup>一〇</sup>「まぼろしの東京」に気づき、その執着を失ったからであろう。それに加え、東京から地元へ、そして地元から東京への移動は、心をかき乱すほどの大きな感情のうねりとなっている。ゴーストタウンのように寂れた町の風景を見て、「厄介な郷土愛に心の中がぐちゃぐちゃになった」<sup>一一</sup>り、東京にいながらも「ついさっきまで見ていた景色が脳裏にフラッシュバックして、美紀を大いに混乱させた」



のは、美紀が二つの場所に立脚し、その比較の中で相互的で客観的な視野を持ち得たからだ。そうした複雑な郷土愛を仕事へと具現化するには平田の存在が必要だったが、上京前の高校生の「家と学校の往復で参考書ばかり目を落としている美紀には、なにも見えていなかった」ように、移動によって美紀は関心を地元へと向かわせることになる。そしてケアを段階的に四つの局面で示したジョアン・C・トロントは、「第一に、ケアには、関心を向けることが必要」であると述べている<sup>10</sup>。であるから無関心あるいは無知は、ケアの対極にある言葉であろう。いかなるケアをするにせよ、まずそこに関心を払い、可視化することが大前提となる。

こうした地元や他所への無関心はテキストの別の箇所にもあらわれている。物語の冒頭、榛原家の正月の食事の場面には香箱蟹が登場する。香箱蟹とはズワイガニの雌のことで、北陸地方でこの名で呼ばれる。作者の出身である富山を想起させ、また代々漁業に携わっていた美紀の実家や地元を連想させるものの、美紀の地元がどこであるかはテキストには明示されない<sup>11</sup>。とはいえ、「魚が減って、漁師も減った海」がある地方の美紀の実家は、

漁獲量がめつきり減り、家業の漁業を辞めている。かつての生活の糧としての資源が失われ、人が減り、不穏な気配が立ち込め、サラリーマンへと鞍替えした父が勤めていた工場も閉鎖され、それにより美紀は実家からの仕送りを打ち切られ、大学を中退し水商売で働くことを余儀なくされる。その一方で榛原家では漁期が短く希少な食材である香箱蟹を堪能している。希少で美味であるがゆえに有り難がつて食べているものの、香箱蟹がどこでどのように獲れているのか、それを獲る漁師の生活にまではもちろん関心はいかない。

また冒頭で華子が、そして結末で美紀が乗るタクシーの運転手は酷く雪が降る地方出身だという。この運転手がなぜ東京に働きに出ているのかは説明されないが、東京の生活は地方の資源や出身者によって支えられていることが示される。しかしそれを享受する東京出身者が、そこに関心を払うことはない。タクシー運転手の田舎の話聞いた華子が「東京以外の地理なんてさっぱりわからないし、とくに興味もなかった」ように、狭い世界にいる華子にとってそこに関心が向けられることはない。しかし最終的に華子や美紀は、狭い限られた世界から視

野を拡げること、初めて此処と其処の差異性に気づき、そこに足りないものや必要とされるものに関心を向けることができるようになる。彼女たちの労働は文化や資本の中心化を是正し、多元的な社会のあり方を模索する。それを彼女たちは友人同士というプライベートな女同士の関係性の中で、気配りや関心を向けること、つまりケアの方法を内側から外側の領域へと拡げていくことである。

#### 四、青木幸一郎と「対等」になること

華子と美紀が新たに人生を踏み出した一方、狭いコミュニティに留まり続けるのが幸一郎である。終章で幸一郎は政治家になるべく地方と東京を行き来するものの、その土地は選挙区でありあくまで人脈作りのための会合に顔を出している。政治家を輩出してきた青木家の長男という宿命から「逃げられない」ように、自分の意志で人生を決めることができないところに同情をみることもできるかもしれない。しかしながら「日本を動かした人物の子孫は、いまも同じ場所に集積して、そこを我が物

顔で牛耳っている」というように、幸一郎はその出自ゆえに特権性が与えられている。慶応の内部生で、東大の大学院を出て弁護士そして政治家となるように、華々しい経歴の持ち主である。だからこそ華子も美紀も惹かれたい一方で、「対等」な関係が築けなかった。幸一郎について、美紀が「本質的には……すごく情の薄い、ちよつと冷たい人」とし、華子が「……心が……あんまり感じられない」と語るように、親しい間柄であるはずの二人との心的距離は縮まらない。それは予め決まった人生に向かい、努力を惜しまず邁進しようとする彼の真面目さや実直さも一因となっている。

幸一郎の美紀との関係をみると、親の離職によって水商売で働き、自力で生きてきた寄る辺のない美紀にとつては、幸一郎は「保険」である。また大学時代の憧れの王子様であり、後にホステスと客として再会し親密な間柄になってからは、「その王子様と対等に遊べる関係を手放したいだなんて、思うわけがなかった」。ここで「対等」という言葉が使われるが、それは後に「間違ひなく美紀を搾取し、損なっていく」関係であったと認識しなおされるように、決して「対等」ではない。美紀は華子と違

い結婚を第一に考えているわけではないが、とはいえ、報われない思いを抱き続けることは疲弊する。のみならず水商売で培った「見栄えもして座持ちもうまい」美紀の能力は、その後にはIT企業に転職してからも、幸一郎に利用され続ける。パーティに呼び出され同伴させられる美紀は、恋人あるいはもつと曖昧な関係のもとで、賃金が発生しない労働へと駆り立てられている。そして幸一郎の余念ない人脈作りのために搾取されていく。それは幸一郎が政治家になるために、華子はその申し分のない妻として選ばれたのと同様である。

一方、幸一郎と華子との関係をみてみると、美紀や相楽のアドバイスの甲斐もなく、本音で話し合う機会を逃したまま、二人は離婚する。幸一郎は仕事で家にいることが少なく、また喧嘩して華子が出ても、幸一郎の帰宅前に戻ってくるため「ひとり相撲」であったため、華子の怒りや悲しみの感情は気づかれることがなかった。とはいえ、一週間に一度の割合で大きな諍いが起きたというのに、離婚を突き付けたときに「え、意味がわからないんだけど」と言い放つ幸一郎は、自分の特権性ゆえに離婚されることはないとあぐらをかく傲岸さと、家庭

や妻への無関心がある。それは無理やりにも話し合いの場を持たなかった華子にも非があるのかもしれない。しかし他者への無関心や無配慮に起因する幸一郎の冷たさは、政治の問題でもあるのだ。美紀が地位も名誉も金もある中年男性を「自分と自分の周りのお友達だけが世界の中心で、それ以外の人のことなんて本気で視界にも入ってない」と辛辣に批評し、また華子が特権階級の狭い世界に生きる幸一郎が政治家になることに対して、直感的に「空恐ろしい気持ちに駆られた」ように、幸一郎の問題は家の外の問題でもある。それは華子が親密なつながりにおけるケアを、外側の仕事へとひらいていったことと好対照をなすものでもある。

ところで、幸一郎が政治家になることを妻である華子に相談しなかったのはなぜだろうか。あらかじめ決められた運命として相談する余地すらなかったからだろうか。華子は妻である自分に相談がなかったことに傷ついていくが、幸一郎はそれを言うことができなかったのではない。幸一郎は「逃げられない」という幸一郎の言葉を受け、華子はそこに「諦観」と同時に、「このときはじめて、幸一郎が本音で話していると思った」ように、決められたレール

ルに乗る生き方は幸一郎にとって不本意だったともいえる。そして、そこから降りられない自分の弱さを見せることができなかつたともいえる。ここに幸一郎の本心があるとしたら、そしてそれをようやく華子に話すことができたのなら、そこに可能性をみたい。

華子や相楽が幸一郎と同じ狭い世界から外へ飛び出し、また幸一郎の姉が海外在住であるように、同じ青木家に生まれていても、女か男かの別により、人生は大きくかわる。男であることが幸一郎を狭い場所に縛り続けているとしたら、まずその「男らしさ」<sup>二三</sup>から降りることが必要だろう。杉田俊介はマジョリティである男性が「他者の前に自分を無知で無力なものとして差し出す、他者の前に無防備で脆弱な自分（たち）をさらけ出す」<sup>二四</sup>とで自己変革をみるように、元妻の華子に本音を話すことはその一歩であろう。他方、華子もやはり当時は幸一郎のそうした悩みに配慮することができていなかった。しかし他者と交流し視野を広げ幸一郎がいうところの「しつかり者」の現在の華子であるならば、かつては一方的に望んでいたケアされることを、相楽にしているように今度は幸一郎へと向けることができるかもしれない。

華子は「わたしいま、やっと幸一郎さんに、自分を出せる気がする。対等に話せてるって感じ」と自らの感情を吐露する。これは裏返して言えば、それ以前の二人の関係性では、つまり恋人や夫婦としては「対等」ではなかつたということである。敬語を使いながら話す華子と、たとえ年上であつても軽口を叩きながらフランクに話す幸一郎が、「対等に話せている」かどうかは疑問が残るところではあるが、少なくとも、華子がこの時点で「対等」と思っていることは確かである。それは華子が幸一郎が初めて「本音で話している」と感じ、また「声を上げて笑うことはほとんどない幸一郎が、この時に「大笑い」しているところからも、幸一郎が華子を信頼し腹を割って話していることがうかがえるからである。こうしてケアされる側からケアする側へ、そしてケアを受け入れる弱さを認めることの先に相互的なケア、つまり「対等」な関係がみえてくるのではなからうか<sup>二四</sup>。

### おわりに

今まで、華子と美紀を中心に、二人の対話のあり方や、



新しい人生における仕事のあり方を、気遣いや関心を寄せるケアと接続させ、そこに女同士のつながりをみてきた。加えて幸一郎について、弱さを見せることのできない男性の生の困難も描出されていたことを指摘した。華子は友人との私的領域で生じるケアを公的領域である仕事へと拡張し、美紀は無関心であった地元へと関心を寄せることでそこに新たな仕事を見出した。その際に、移動することが自己を相対化する視点の獲得となり、ひいては無関心から関心へ向かう契機となっていた。そこでは中心化する社会のあり方を是正する多元的な価値観が描出されてもいる。

こうして、華子も美紀も、相楽と平田との友情の中で、生を充実させるが、はたして女の分断は乗り越えられたといえるのだろうか。「自分たちの友情が、女だけの世界で平和に調和していたころを思い、華子はかすかに胸を痛める」のは、男性の介入によって既婚／未婚とに分けられた際の華子の心境である。華子と美紀は対立こそしなかったものの、二人とも幸一郎から離れ、かつての友情へと回帰していった。独身の友人同士で仕事をするとは、そして男性をいったん人生から締め出すことは、

「マンズ・マンズ・ワールド」を脱したようであり、それは美紀がいうところの「それってすごく、ファンタジーな気がする」世界ともいえなくもない。

これより前に書かれた短編「お嬢さんたち気をつけて」『かわいい結婚』（講談社、二〇一五年）では、一人の男性をめぐる女性と友人同士が分断を乗り越え、人生において共闘していく様子が描かれている。結末は、二人が別々の方向を向きながらそれぞれに自分の未来を思い、溜息をつくところで終わる。仕事と結婚のどちらを選んでも困難が待ち受けていることが暗示される結末には、わかりあえないかもしれないが、一緒に過ごしてくれる友人がいるという唯一の救いもある。

しかしながら、彼女たちがこれからどう生きるのか、女性同士のみならず、対男性との関係のなかで、いかに「対等」に生きるのかは、今後の作品を待たねばならないだろう。山内作品は「少しずつ弁証法的に発展していく」<sup>二五</sup>ように、また作家のライフステージとも重なるようにテーマも少しずつ変容しているが、男性のいる世界での男女の「対等」のあり方については、次のエッセイ『皿洗いするの、どっち？目指せ、家庭内男女平等！』

でより追求されることになる。

## 付記

- ・テクストの引用は山内マリコ『あのこは貴族』（集英社、二〇一六年）に拠った。
- ・本稿は令和三年度高志プロジェクト「〈女性〉と〈労働〉からみた富山女性とその文化的背景―『大コメ騒動』、そして『あのこは貴族』へ―」による成果の一部である。

## 注

- 一 谷川拓矢「現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から山内マリコへ―」『群峰』（二〇一八年三月）
- 二 土井隆義「意図せざる出会いの豊かさ―映画『あのこは貴族』の女性たちをめぐる―」『図書』（二〇二一年一月）
- 三 なお結婚における二十七歳という年齢について、作田佳菜「山内マリコ」やがて哀しき女の子」にみる地方都市の女性像」『富大比較文学・第二期』（二〇一九年二月）に地方都市の結婚観についての分析がある。
- 四 近松門左衛門 諏訪春雄訳注『曾根崎心中 冥途の飛脚 心中天の網島』（角川文庫、二〇〇七年） p 259 脚注。

- 五 野島孝一「アートな時間 映画あのこは貴族 境遇の異なる2人が出会う女性による女性のための作品」『エコノミスト』（二〇二一年二月）
- 六 谷川は「憧れとコンプレックスは表裏一体」と述べている。注1に同じ。
- 七 山内マリコ『皿洗いの、どっち？目指せ、家庭内男女平等！』（マガジンハウス、二〇一七年）
- 八 ケア・コレクティブ 岡野八代・富岡薫・武田宏子訳『ケア宣言』（大月書店、二〇二一年） p 39・40
- 九 村上瑞季「山内マリコ『メガネと放蕩娘』における富山と学生によるまちづくり」『富大比較文学・第二期』（二〇一九年二月）では、地方都市の商店街の活性化に際して、他の地方都市からやってきた人物が「客観的」に「問題意識」を持ち「商店街の外で暮らしたことがある人物が積極的に行動をしている」という。
- 一〇 ジョアン・C・トロント 岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？―新しい民主主義のかたちへ』（白澤社、二〇二〇年）では、ケアの局面を「1、関心を向けること Caring about」「2 配慮すること Caring for」「3 ケアを提供すること Care-giving」「4 ケアを受け取ること Care-receiving」とする。
- 一一 地方都市がどこか明示されない点について、谷川は「地方都市（だ）けにとどまらない問題」をめぐるより普遍的な物語への企図が窺われる」と述べている。注1に同じ。ちなみに映画『あのこは貴

- 族』では美紀の地元の場面は富山で撮影され、富山弁も使用されている。DVD『あのこは貴族』（東京テアトル制作、バンダイナムコアーツ発売、二〇二一年）
- 一二 西田谷洋「らしさを生きる／らしさに抗う―山内マリコ『選んだ孤独はよい孤独』と『あたしたちよくやってる』』『芸術至上主義文芸』（二〇一九年一〇月）では、「自分らしさ」について論じる中で、「日本の男性優位社会において、向いていない中で自分を保ち続けることで出世してしまう／いかざるをえない男のあり方も示している」と指摘する。
- 一三 杉田俊介『マジョリテイ男性にとってまっとうさとは何か』#Me too に加われない男たち』（集英社新書、二〇二一年） p.47
- 一四 映画『あのこは貴族』の監督・脚本である岨手由貴子は幸一郎と華子は「定義できない関係性を築いた」とし、「ハッピーエンドなんだと思っていた」と述べている。「映画『あのこは貴族』公開記念インタビュー 監督・岨手由貴子 シスターフッドからフレンドシップへ」『小説すばる』（二〇二二年三月）
- 一五 小谷英輔「〈子どもたちの時間〉の現代―山内マリコ論序説」『群峰』（二〇一七年三月）

## 群峰 第6号

発行日：2021年4月1日

◇特集 翁久允

逸見 久美

わが想い出に生きる父翁久允

須田 満

翁久允「安孫子久太郎翁と私」―自筆原稿の翻刻と解説

水野 真理子

翁久允と富山―『高志人』で目指した郷土研究

近藤 周吾

新民謡の流行―『民謡詩人』を中心に

◇研究論文

谷川 拓矢

共振する性欲―田中兆子「べしみ」論、あるいは性欲文

学史序説

◇資料・報告

高熊 哲也

「黒百合」私注

金山 克哉

滑川文学散歩 記録

高熊 哲也

文学散歩報告 いたち川沿いを歩く

◇2019・2020年度 活動報告